



Title	沖縄における近代化の諸相と共同性の選択 : 模合の慣習を例にして [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	渡口, 紘子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(法学)
Dissertation Number	甲第16524号
Issue Date	2025-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95735
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Hiroko_Toguchi_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学 位 論 文 内 容 の 要 旨

博士の専攻分野の名称： 博 士（法学）

氏名 渡口 紘子

学 位 論 文 題 名

沖縄における近代化の諸相と共同性の選択
—模合の慣習を例にして—

本論文は、沖縄の模合という慣習に着目し、近代化における共同性と生ける法の変容について検討するものである。

模合とは、相互扶助的な金融である頼母子講や無尽講の一種であり、日本本土において講が衰退した現在でも沖縄において広く行われている。沖縄社会における模合の規範と機能を明らかにし、人々はどのように模合を選択しているのか、そして沖縄社会の共同性がどう関わっているのかについて、社会調査の結果をふまえて考察する。

第 1 章では、沖縄社会において模合が担っている経済機能と親睦機能、およびトラブル発生時の処理とそこで働く規範について、歴史的背景を含めて検討する。

戦後、近代的な金融機関を利用できない庶民や中小企業の資金調達手段として模合が広く利用されていたが、金融機関の発達とともに模合の経済機能に対する需要は次第に減少し、現在は親睦を目的とした模合が主流となっている。

模合は金銭のやり取りを伴うため加入者を会合に集めることができるという拘束力を持ち、掛金の支払いを怠ると模合の人間関係と信頼を失うおそれがあることは共通了解となっているため、あえて模合を「口実」として利用することで定期的な集まりを実現しており、現在の模合は、自身が選んだ人々とのつながりを維持、強化するために選択されている。

模合のトラブルにおいては、特に高額の場合は座元の経済的な責任能力が座元自身の社会的な信頼と評判を左右し、トラブルを起こした者は社会的な信頼と評判を落とすことになる。こうした社会構造に基づき、座元が経済的な損害を補償し、トラブルを起こした者は模合メンバーの肩書を剥奪され、コミュニティから排除されることで制裁がなされるという形で内部にトラブル処理の仕組みが成り立っているため公的機関が頼られることは少ない。

第 2 章では、大阪と兵庫、およびハワイの沖縄系移民社会における模合について検討する。

かつて日本本土では、沖縄出身者に対して言語や文化の違いによる差別的な扱いがあり、これに加え海外ではマイノリティである日系人のなかのマイノリティとして沖縄出身者は社会的な地位が弱かった。県人会や郷友会を結成し、そのなかで模合を行うことによって経済的な相互扶助を可能としつつ親交を深め互いに励まし合い、生活を築き上げていった。

戦前から多くの沖縄出身の労働者を受け入れてきて関西では、大正区やその周辺地区の県人会や郷友会のつながりで沖縄出身者同士の模合がよく行われており、経済的な相互扶助や親睦の場として機能していたようだが、現在は模合に対する経済的な需要が低下し、主に親睦のために行われている。

1 世から 3 世までの県人会の活動に参加する人たちが行う模合は、集まるための理由として選択されており、模合によって定期的に集まり親睦を深めることで県人会のコミュニティも維持されており、県人会活動や模合を通じて沖縄との関係も構築されている。模合のトラブル処理については、経済機能の大きい模合における座元の補償責任と模合グループやコミュニティからの排除という制裁が確認された。また、兵庫県において模合は利息付きが原則であり、無利息のものは積み立て会として区別され、共通の目的のための貯金や親睦のために利用されている。

ハワイでは、1、2 世の間では事業を始めるための相互扶助的な金融と親睦の双方の需要から模合がなされていたが、2 世以降は、経済的に安定し社会的地位も向上したことから経済的な需要は低下し、現在の県人会を中心とする沖縄系コミュニティにおいて模合はほとんど行われていないようである。しかし、ほとんど日本語の話せない 3 世たちが中心となっている県人会と距離のある新 1 世(戦後の新移民)たちの間では模合が行われており、母語で会話できる親睦の場として機能している。

第 3 章では、沖縄における近代化のなかの共同性の諸相と模合の選択について考察する。

模合の本質は、具体的な人間関係に基づく交換(共同)行為であり、この仕組みにより模合の規範の実効性は支えられ、沖縄の社会変動に伴う要求に応じて変化しながら相互扶助から金融、親睦に至るまでの様々な機能を提供してきた。

先行研究において、模合は沖縄の共同性に支えられているとされてきたが、沖縄における共同体との関りは階層によって大きく異なること、人とのつながりはそれほど強く感じられていないことを確認する。共同体から距離をとった生活を営む安定層の人々は、その拘束力によって人とのつながりを保つために自覚的に模合を選択している。伝統的な共同体から解放され個人化された近代社会において人間関係を構築し、維持することが困難となっているなかで、模合はこれを克服する手段となっていることを指摘する。

また、沖縄の人々が行う模合の象徴的意味についても考察する。沖縄の人々が日本本土からの沖縄イメージを内面化していくなかで、模合も「沖縄らしい慣習」として意味付けがなされたことが、沖縄において慣習としての模合が現在まで維持され、選択され続けている一

因ではないかということを検討する。

終章では、模合の理論的分析を通じて沖縄社会における共同性創出の在り方を提示する。沖縄社会においては強固な共同性が残っているから模合を行っているというよりも、模合によって共同性を創出しているといえる。沖縄の資源の乏しさや戦後の荒廃のなかでは相互扶助により生活を支える必要があり、模合による共同性の創出も沖縄社会の変動に対する戦略的行動の一つとして位置づけられる。

沖縄の人々は所与の共同体の拘束ではなく、自覚的な選択に基づき、ときにアイデンティティとも結びつけながら模合を選択し、共同性を創出している。このような慣習や伝統の選択による共同性の創出は、近代化における個人化や流動化に対する抵抗として捉えられることを示す。